

「そろそろ文字の読み書きができるはずなのに」中編

シリーズ

前編では、文字の読み書きに必要な能力として、文字を見て認識することや、目の機能と協調して運動機能や感覚機能と連動させることが必要というお話をしていました。今回は、「読む」「書く」がそれぞれできるようになるための仕組みについて触れたいと思います。

「読む」メカニズム

書かれている文章を読むには、まず文字の一つ一つの「形」を覚えることが必須ではあります。「形」と「音」と結びつけて覚えていくことが重要になります。日本語の平仮名の一文字には一音しかありませんが、漢字の一文字にはいくつかの音があります。なので、漢字の読みは、前後の文章から予測して音を選択する必要があります。

文章を読んでいく過程には、①文字を目で追いながら一つ一つを音に変えていくシステムと、②文字の羅列から単語を認識し、その意味や読みを自分の脳の辞書（以下レクシコン）から抽出し、音に変えていくシステムがあります。①は、文字が読めるようになつたばかりの頃、一つ一つの文字を目で追いかながら音にするけど、読みながら意味を理解してはいないう状況で

す。②は、読むことに慣れてきた頃、一つ一つの文字を目で追うのではなく、単語の単位でまとめて認識し、意味を理解しながら読み進んでいく状況です。①と②は並行して起りますが、読みに困難がある子どもたちは、①が長いこと続きます。いわゆる「遂字読み」です。

読みに困難がある場合、前編でもお伝えした「見る」ことの苦手さから、文字の形が認識できなかつたり、文章の文字を滑らかに目で追えなくて、指で押さえていかなければ見失つてしまふ、ということが起きます。また、文を区切ることができず、どこからどこまでが一つの単語なのかがわからぬので、自分の脳の「レクシコン」と照らし合わせて滑らかに読む、意味理解しながら読むということも難しくなります。

滑らかに文章を読む機能は、とても複雑で精密なものであり、見て認識する、音と結びつける、滑らかに目で追う、文の区切りを認識し単語とみなす、単語は音や意味とともに脳内に蓄積し「レクシコン」を作る。次に読む時には文字の一つ一つを読むのではなく、単語の単位で「レクシコン」と照らし合わせ、意味理解しながら読む、このような一連の流れを滞りなく行うすれば

らしい機能なのです。

「書く」メカニズム

書くためには、見たものを文字と認識し、形を覚え、その通りに書くための運動出力に変換する必要があります。しかし、文字の形は単純ではなく、縦線、横線、斜め線、曲線、交わる線などと複雑です。書く機能の発達が、そのような線を全て書ける段階になつていなければ、文字を書くことは非常に難しいのです。特に斜め線が書けるのは幼児の後半で、いわゆる三角形、菱形などが書けることが、文字の書きにもつながってきます。中には、線の交わりが認識できない子どももいて、そのような場合は「な」や「ね」のような文字を書くことがとても困難になります。

文章で書くとなると、どの単語を使うのか、それにはどの漢字が当てはまるのか、その漢字の書き順はどうかなど瞬時に判断して運動で出力する必要があります。聞いて書くか、見て書くかでも違ひ、聞いて書くには言われたことばを聴覚的記憶にとどめ、ふさわしい文字や文脈を蓄積した脳の記憶「レクシコン」から出して書くことになります。見て書くには、黒板などの文字を視覚的記憶にとどめ、見たものと同じ形を書くか、文字を音に変えて記憶しそれに当てる文字を「レクシコン」から出して書くなど、様々な手段から脳が手に指令を出し書くという行為を実行していきます。

読み書きに困難がある」ということ

「読む」「書く」のメカニズムを記載

しましたが、実際はもっと複雑で、ここに書き切れる量ではありません。しかし、前述した内容を読むだけでも、

「読む」も「書く」もいくつもの機能が絡み合い、それらが協調して運動していくことが、滑らかな読み書きにつながることはおわかりいただけたのではないかでしょうか。「読み書きに困難がある」ということは、この機能の何

かを見つけることをせずに、ただただ読みの特訓をするとか、10回書かせるとか、子どもにとつては苦痛でしかありません。

次回は、このような子ども達のために必要な支援の手段や配慮についてお話しします。



参考文献① 特集 限局性学習症（学習障害）／

関あゆみ（北海道大学大学院教育学研究
院）／児童青年精神医学とその近接領域 58
(2) · 211-226 (2017)

参考文献② ディスレクシアでも大丈夫！読み書きの困難とステキな可能性／藤堂栄子 著／

文書寄贈 NPO法人こうろ・コミニケーション
ぶどう社
の発達支援